

修士論文（要旨）

2021年7月

日本で生まれた在日ブラジル人のライフストーリーから見る将来図
—社会的影響による言語意識の変容—

指導 齋藤 伸子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

219J3901

ヌネス ダニエラ

Master's Thesis (Abstract)

July 2021

Transformation of Language Awareness Due to Social Influence: A Future Image of a Brazilian,
Born and Resident in Japan, Using a Life Story Approach

Danyella Nunes

219J3901

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Nobuko Saito

目次

はじめに	1
第1章 研究背景と目的	2
1.1 日本における労働力不足と日系人の定住化	2
1.2 在日外国人の子どもの教育事情	4
1.3 研究目的	5
第2章 先行研究	6
2.1 言語意識	6
2.2 母語と継承語	7
2.3 在日外国人の子どもの将来	8
第3章 調査概要及び予備調査	10
3.1 調査協力者概要	10
3.1.1 協力者プロフィール	11
3.1.2 協力者家族プロフィール	11
3.2 分析方法	11
3.2.1 ライフストーリー	11
3.2.2 複線経路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model : TEM)	12
3.2.2.1 TEM で用いられる基礎概念	13
3.3 予備調査概要	14
3.3.1 言語意識	14
3.3.1.1 ポルトガル語	14
3.3.1.2 日本語	14
3.3.1.3 英語	14
3.3.2 将来図	15
3.3.3 予備調査の考察	15
3.4 本調査概要	16
3.4.1 インタビューの概要	16

第4章 本調査結果および分析.....	18
4.1 TEM分析結果.....	18
4.1.1 本研究における意味づけ.....	18
4.1.2 誕生から小学校入学まで.....	20
4.1.3 第1期 「小学校」.....	21
4.1.4 第2期 「中学校」.....	23
4.1.5 第3期 「高校」.....	25
4.2 言語使用について.....	26
第5章 考察.....	28
5.1 言語意識の変容.....	28
5.1.1 ポルトガル語.....	28
5.1.2 日本語.....	29
5.1.3 英語.....	30
5.2 将来図.....	30
第6章 おわりに.....	33
参考文献.....	I
資料.....	III

日本では、1980年代より日本国内の労働力が不足し、それを担う働き手として来日する外国人が急増した。1990年には出入国管理及び難民認定法が改正され、日系人に「定住者」の資格が与えられるようになった。出入国在留管理庁（2020）の調査によると、日本在住の外国人の数は令和2年6月末には288万5904人にまでのぼった。また、在日外国人の定住化が進んでおり、その中でも全体の約88%が「永住者」「定住者」であるブラジル人にそれが多くみられる。このように定住化が進むと、それに伴う問題が出現し、その一つが子どもの教育が深刻化していることである。

文部科学省（2019a）によると、学齢相当の外国人の子ども11万3698人のうち、不就学の可能性のある子どもは2万2488人だという。また、文部科学省（2019b）の調査によると、特別支援学校を含む全国の公立の小・中・高等学校には現在、5万1126人の日本語指導を必要とする児童・生徒が在籍しており、外国籍の児童・生徒の中では、ポルトガル語を母語とする者の割合が全体の約4分の1を占め、最も多い。米本（2011）によると、年々増加する日本語指導を必要とする児童・生徒の数に伴い、アイデンティティ調査も含め、年少者日本語教育に関する調査・研究は比較的盛んに行われるようになった。さらに非行や不就学、不登校など「抵抗」という視点から彼らのアイデンティティを描こうとする調査・研究も多い。米本（2011）は、過去と現在の関係だけではなく、現在の学習や経験がどのように将来に影響を及ぼすのかも探る必要があると指摘している。また、竹田（2012）は高校進学を希望する子どもたちは進路が制約されていると述べ、進路保証がされていない状況では将来に展望を抱きようがないと指摘している。

本調査では、複数言語環境にあるブラジル人青年の母語と日本語、そして英語に対する言語意識がどのように変化しているか、そして将来を描く上でどのように母語、日本語、および英語をとらえて、どのような社会的影響を受けて進学を決意したかの2点を明らかにすることを目的としている。そのためには、ライフストーリーインタビューを採用し、ライフストーリーの分析に複線経路・等至性モデル（TEM）を用いる。

協力者は日本で生まれ育った日系ブラジル人であり、日本の保育園、小学校、中学校、そして高校に通い、現在は専門学校に進学している。

調査の結果、まず、母語であるポルトガル語については、協力者は「親の言語」であると認識していることがわかった。日本社会で暮らしている以上、親以外とポルトガル語を使うことはほとんどなく、「親の言語」という意識は社会がもたらす影響であると考えられる。

TEM図でも、ポルトガル語に意識を向けることは見られていない。小学校に入学してすぐ母親に読み書きを教わったものの、それ以外で勉強することはなかった。それよりも、海外に行く夢を持ち、そのための英語に力を入れている。しかしブラジルを拠点にしてのことであり、協力者の将来図には欠かせない言語であることが窺える。

小学校に入学してから向き合うようになったのが日本語である。生活上必要不可欠な言語である一方で、小学校で日本語を間違えたことを笑われたことから、苦手意識も高かったと考えられる。しかし、友人関係の輪が広がるとともに、日本人の友達もできた。さらに、高校入試に直面することで、必死になって「国語」の勉強が必要になった。そうした「友人関係」や「入試」などの社会的な影響により日本語と向き合ったことで、学習言語としては一番よく理解できる言語となった。しかし、将来ブラジルを拠点にし、イギリスやカナダに行きたいという夢には、直接反映されていない。日本で暮らしている以上、そこに辿りつくまでのステップの一つに過ぎないだろう。

英語については、母親に言われたから学習するようになり、自分の意思ではなかった。しかし、小学校で習い始め、海外の教師に影響され、自ら興味を持ち始める。英語の音楽を聴き、海外ドラマを見て、徐々に海外に関心を抱き、いつからか、将来は海外に行くことが目標になり、ずっと習い続けている。ブラジル人家庭であり、日本で暮らしている以上言語使用はわずかではあるけれど、将来を描く上で必要不可欠な要素の一つであることがわかる。

協力者Lが描いている将来図には、言語的に考えると、英語がとても大きな役割を果たしている。また、ブラジルに滞在したことで、ブラジルのイメージが明確になり、日本と比較しながら自分に合っているのはブラジルであると感じ取っている。このブラジルの滞在と、英語学習がきっかけで興味を持ち始めた海外の音楽を聞いたり、ドラマを見たりするようになった。海外への憧れが芽生え、ブラジルを拠点にしつつも海外で働けるようになりたいと思うようになる。

今後の課題として、協力者のアイデンティティ着目し、将来を描く上でどのように変容していくのか調査する必要がある。アイデンティティはその人の軸となると考えられ、そこから生じる居心地の良さや物事をどのようにとらえているかイメージすることは将来図に大きく反映されているのではないだろうか。本研究の協力者は、生まれてからずっと日本に住んでいるにも関わらず、ブラジル人である自分を持っていた。このように進学を決意し、「工場」から離れる人生を歩んでいる人を見れば、不就学に陥ってしまう外国人の子どもたちも、新たな夢や希望が持てるだろう。

参考文献

- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ(2012)「複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例」『立命館人間科学研究』第 25 号, pp.95-107
- 大倉安央 (2009)「高校への進学と学習機会—門真なみはや高等学校における学習支援」齋藤ひろみ・佐藤郡衛 (編)『文化館を移動する子どもたちの学び—教育コミュニティの創造に向けて』ひつじ書房 pp.149-172.
- 高民定 (2016)「日本の外国人移住者の言語環境と言語管理 : 言語バイオグラフィーの通時的・共時的語りの分析から」『Global communication studies = グローバル・コミュニケーション研究』第 4 号, pp.169-196
- 桜井厚 (2012)『ライフストーリー論』弘文堂
- 竹田治美 (2012)「外国人児童・生徒の内部葛藤とアイデンティティの模索—学校の多文化教育に向けて—」『奈良産業大学紀要』第 28 巻, pp. 79-89
- 竹ノ下弘久 (2005)「6 章 『不登校』『不就学』をめぐる意味世界—学校世界は子どもたちにどう経験されているか」『外国人の子どもと日本の教育—不就学問題と多文化共生の課題』(pp. 119-138) 東京大学出版会
- 中島和子 (2016)『バイリンガル教育の方法 : 12 歳までに親と教師ができること』アルク
- Hawkins, E.W, 1999. Foreign Language Study and Language Awareness. *Language Awareness*, Vol.8, No3&4, 124-142.
- 福田浩子 (2007)「複言語主義における言語意識教育—イギリスの言語意識運動の新たな可能性」『異文化コミュニケーション研究』第 19 号, pp.101-119
- 宮崎幸江 (2014)「多文化子どもの過程における言語使用と言語意識」『上智大学短期大学部紀要』第 34 号, pp.117-135
- 安田・サトウ (2012)『TEM でわかる人生の経路 : 質的研究の新展開』誠信書房
- 矢部東志 (2019)「<研究ノート>都道府県別にみた外国籍生徒の高校進学率と母語の関係性—「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」の結果を用いて—」
- 米本和弘 (2011)「『中国に行く』／『中国に帰る』—言語マイノリティ生徒の『想像の共同体』」細川英雄 (編)『言語教育とアイデンティティ—ことばの教育実践』春風社 pp.98-116

参考 HP

愛知県庁 (2020) 「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況 (2020 年 6 月末現在)」, <https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokuzinjuminsu-2020-6.html> (閲覧日 : 2021 年 1 月 12 日)

Association for Language Awareness(2021). 「About」, <https://www.languageawareness.org/> (閲覧日 : 2021 年 6 月 22 日)

出入国在留管理庁 (2020) 「令和 2 年 6 月末現在における在留外国人数について (速報値)」, http://www.moj.go.jp/isa/publications/press/nyuukokukanri04_00018.html (閲覧日 : 2021 年 1 月 12 日)

Skutnabb-Kangas, Tove (1984) 「Concept definitions for downloading」, http://www.tove-skutnabb-kangas.org/en/concept_definitions_for_downloading.html (閲覧日 : 2021 年 6 月 22 日) 〈公式サイト〉

文部科学省 (2010) 「外国人の子どもの不就学実態調査の結果について」, https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/012.htm (閲覧日 : 2021 年 1 月 12 日)

文部科学省 (2019a) 「外国人の子供の就学状況等調査結果 (速報)」, https://www.mext.go.jp/content/20200110_mxt-kyousei01-1421569_00001_01.pdf (閲覧日 : 2021 年 1 月 12 日)

文部科学省 (2019b) 「『日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 (平成 30 年度)』の結果について (報道発表)」, https://www.mext.go.jp/content/1421569_001.pdf (閲覧日 : 2021 年 1 月 12 日)